

## 平和と剣

牧師 山本 護

夏の太陽が南アルプスに沈もうというほんの束の間、八ヶ岳教会の集会所が不可思議な静寂に包まれました。今この世界の各所で戦争していることは幻じゃないのか、と欲してしまふほどの静けさです。「平和は怖い、地獄を隠し持っているようだ」とは、フェリーニの何かの映画で聞いたセリフ。日本の平和にも地獄は隠されていて、奄美、沖縄、八重山諸島へと続く各所で、自衛隊のミサイル基地が着々とつくられています。



動物学者の K.ローレンツは『ソロモンの指環』で、動物としての人間をこう説明しています。「自分の体とは無関係に発達した武器をもつ動物が、たった一ついる。

したがってこの動物が生まれつきもっている種特有の行動様式はこの武器の使い方をまるで知らない。武器相応に強力な抑制は用意されていないのだ」。

なるほど確かに、恐ろしげな角をもつ偶蹄目の雄同士が、巨体を激しくぶつけ合い血を流しても敗者が死ぬことはありません。武器相応に強力な抑制が用意されているからでしょう。ローレンツは続けて言います。「武器を創り出すことと、責任感つまり人類を我々の創造物で滅亡させぬための抑制を創り出すこと、どちらがより容易なことだろうか？我々はこの抑制も自らの手で創りださねばならないのだ。なぜなら我々の本能にはどうても信頼しきれないからである」。

人間が身につけている優しさや憐れみ、善悪や信義、約束や想像力が武器使用の抑制にならないことは、いやというほど見せつけられています。人間の本能や自力は信頼できないのだから、じたばたせず神によりたのんで祈り続けよ、ということなのか。それでは平和や武器について、キリスト・イエスはどう語っているのでしょうか。

「わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思つてはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ(マタイ 10:34)」。福音書をくくつてみたら、おかしな箇所に目がいつてしまいました。いや、でも、そうかもしれないな。この静かな平和の中で着々と地獄がつくられているのなら、それを露わにする剣は必要でしょう。

「神の言葉は生きており、力を発揮し、どんな両刃の剣よりも鋭く、精神と霊、関節と骨髄とを切り離すほどに刺し通して、心の思いや考えを見分けることができる(ヘブライ 4:12)」。平和とは、ほとんど現状維持することではありません。神の言葉によって鋭く平和が刺し通され、もはや「地獄」が隠れようがないほどに風通しよくされること。

夏の薄暮、集会所に静かな風(霊)が吹き、平和を祈る新鮮な一日が創造されようとしています。神の民が夕べをその日の始まりとしたことに合点いたしました。Ω